

# E-REPORT

## 特集 英語教育の新しい流れ

### CONTENTS

- ・本校の英語教育とSGHの取り組みについて  
校成学園女子中学校高等学校 教頭 江川 昭夫・国際交流部長 穴戸 崇哲..... 1
- ・普連土学園の英語教育とネイティブ教員の視点  
普連土学園中学校高等学校 校長 浜野 能男・英語科 Daniel Stifler..... 6
- ・男子校の英語教育と「成城版グローバル教育」  
成城中学校高等学校 校長 栗原 卯田子..... 9
- ・本校のSEC(スーパーイングリッシュコース)の取り組みとネイティブ教員の役割  
目白研心中学校高等学校 教頭 長谷 良一.....13
- ・TEAP第1回公開試験を終えて  
公益財団法人 日本英語検定協会 制作部部長 本間 充.....16
- ・グローバル時代に求められる英語教育 ~実践女子のGSC英語教育を例に~  
実践女子学園中学校高等学校 グローバル教育部長 関 孝平.....20
- お知らせ 「E-REPORT」について 配信について.....12  
編集後記.....28

## 本校の英語教育とSGHの取り組みについて

佼成学園女子中学校高等学校 教頭 江川 昭夫

国際交流部長 穴戸 崇哲

ききて 編集部

最初に、佼成学園女子中学・高等学校でのこれまでの英語教育・国際交流の取り組みについてご紹介ください。

江川 本学園の設立理念は「国際社会の平和に貢献できる人材の育成」です。求められるのは、戦いの芽を摘むように活動することでしょう。そのためには世界の人々を知り、互いに理解し、助け合うことが必要です。前提となるのは世界の人々としっかりコミュニケーションがとれることです。こうした考えから、本校では1992年に英語コースを高校に設置、英語重視の特色ある教育をスタートしました。今でこそ英語コースを設置している学校は数多くありますが、当時はまだ少なかったと思います。英語教育を深めていくと必然的に海外でのホームステイや留学を検討するようになってきました。

穴戸 留学と言っても、いきなり海外に連れて行ってもうまくいきませんから、2000年からまず中学でイメージプログラムを開始、2004年にはニュージーランドに提携校を作って、選抜された希望者による1年留学を開始しました。これは高校に特進留学コースを設置して、そのコースでの実施です。さらに取り組みを広げるため、高2の夏に全員でイギリスに修学旅行に行き、希望者はそのまま現地に残って40日間ホームステイを行なう短期留学を開始、今年度の中学入学生からは短期留学の中学生版として、中3の3学期に全員でニュージーランドに修学旅行に行き、希望者はそのまま現地に残るプログラムも開始します。こちらは2ヵ月半の中期留

学になります。こうして順次対象生徒を広げて深度化を図ってきました。

よく、コミュニケーションの英語と大学受験の英語は違う、という話を聞きますが、コミュニケーションに重点を置いているわけですね。

江川 いいえ。本校では「使える英語」と「合格(うか)る英語」の両方の伸長に取り組んでいます。ネイティブ教員も常勤5名を確保、英語での校内放送やパイリンガルの掲示物の作成など、校内で常時英語に触れる環境を整備する一方、学校全体で毎年6月と10月に取り組む「英検まつり」の開催をはじめ、「多読チャレンジ」など、様々な取り組みを実践しています。

穴戸 「使える英語」では、英語会話の授業を1クラス3教員体制で実施しています。まず1クラスを2分割し、2名の外国人教師とコーディネーターの日本人教師を配置しました。生徒一人ひとりが、実際に英語を「話し」て「聴く」ことのできる体制です。「合格(うか)る英語」の面では、速読・作文・文法・単語・熟語などを徹底的に繰り返し、毎時間テストで確認しています。英語に対する基礎力と「合格(うか)るためのねばり強さ」を習得させています。こうした取り組みは特進留学コースに限らず、全校で実施しています。継続的な演習の成果で、英検1級、準1級、2級取得率が上昇しました。これが難関大学合格率の上昇につながっています。

かなり徹底した英語教育を展開していますが、実際には英語が苦手の生徒もいるのではないのでしょうか。

穴戸 中学から入学する生徒では、最初から英語に取り組みますから、高い目標を掲げて生徒を引っ張っていくというよりも、小さなステップの積み重ねで生徒の力がボトムアップしていくように指導しています。高校から入学する生徒では、公立中学校である程度の形ができてから入学してきますから、特進留学コースは別として、中には英語があまり得意ではない生徒もいます。でも、校内が自然に英語漬けになるような環境ですし、教員の指導の工夫だけでなく、「みんなで英語をマスターしようよ」という雰囲気も醸成されていますから、「自分にもできる」と思って英語が苦手な生徒も取り組んでいます。あまり心配はいりません。

江川 部活漬けの毎日を送っている生徒たちもしっかりやっています。本校のハンドボール部は今春2年連続全国選抜大会で優勝しています。そのため部員の一部は日本代表として海外にも派遣されています。アジア選手権や世界選手権などです。現地では向こうの選手と同じホテルですから、必然的にあいさつもしますし、だんだん仲良くなってきます。そんな流暢な英語ではありませんが、生徒たちはしっかりコミュニケーションをとっています。ですから、ハンドボールの部員たちも英語力は意識しているようで、洋書をたくさん読む「多読チャレンジ」に挑戦したり、英語の先生には英語で話しかける光景も見かけます。こうした行動は、ハンドボール部以外の生徒たちにも良い影響を及ぼしています。

S G Hに手を挙げよう、とお考えになったのはどうしてでしょうか。

江川 本校の英語教育が深化していくにつれて、成果も出てきて「英語の佼成女子」と評価をい

ただくようにもなってきました。そうなる则次のステップを考えるようになります。1年留学はもちろんです、短期留学でも、戻ってきた生徒は出発前よりも確実に遅くなっています。いくら英語が得意でも、留学先では意思疎通が上手く図れなくて苦労したこともあったでしょう。学習面では英語で授業を受けるわけですから、同じ教科でも日本語で理解するよりも難しく感じたものもあったでしょう。生徒一人ひとりがそれぞれ困難な状況に直面し、それを乗り切って留学を完遂してきたわけで、こうした経験が生徒たちを遅しく育てています。それなら一人ひとりが直面した困難を、生徒個人のレベルに留めるのではなく、まわりの生徒や大人も巻き込むような課題、さらに社会全体で取り組む課題に広げていけば、もっと遅しい生徒が育っていくのではないかと、いや、育てていきたいと考えるようになりました。

穴戸 たまたま特進留学コースの6期生で、現在早稲田大学国際教養学部の2年生に在学しながら、大学のカリキュラムとしてヨーク大学のロースクールで学んでいる生徒がいます。将来はNPOに所属して、戦争が終わった国での地雷撤去関連の仕事に従事したいと考えていることを聞いています。まさに「平和社会の繁栄に貢献したい」わけですね。何も全員地雷撤去で活躍してほしいとは言いませんが、このような気概を持った生徒が一人でも多く育ってほしい、そんな思いが教員の中に生まれてきました。国際交流部では、こうした生徒を育てるための国際交流とは何かを検討するようになります。他の分掌でもそれぞれいろいろな検討が行なわれました。

江川 そんなときに文部科学省のS G H構想が報道され、検討したところ、本校で具体化した、具体化に向けて動いているプログラムと重なる面が多い、ということがわかって、手を挙げてみよう、という話になったわけですね。本校は決して高偏差値のブランド校ではありませんが、先ほどお話ししたような英語教育や留学の積

み上げには自信があります。実績をベースに、本校の教育プログラムをさらにパワーアップしたい、と考えてSGHに応募することにしたわけです。

文部科学省に提出したSGHのテーマについてお願いします。

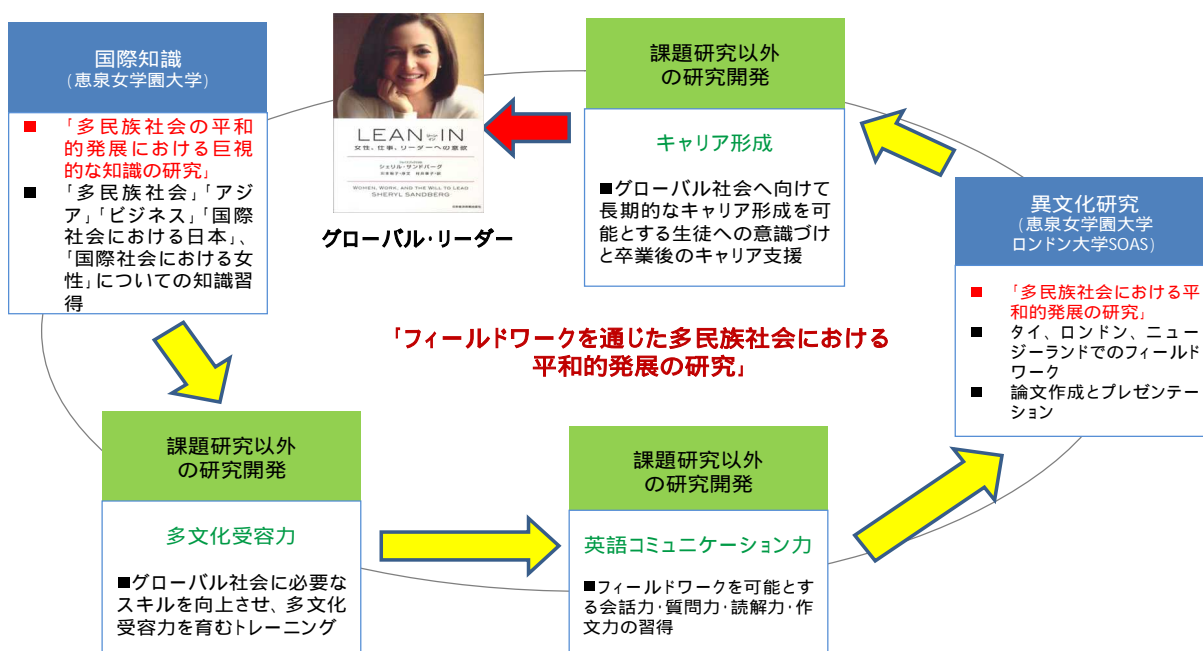
宍戸 SGHは質の高い教育プログラムの研究開発、実践とそのための体制作りの取組みですから、本年(2014年)3月28日指定時の研究課題の構想名を「グローバル人材に必要な知的基盤の醸成」としています。その後「フィールドワークを通じた多民族社会における平和的発展の研究」と、より進化したものになっています。研究テーマは、今まで本校が実践してきた英語力の育成・向上と、留学や海外交流を柱とする異文化体験を土台に、「国際知識」「多文化受容力」「フィールドワーク」「プレゼンテーション」「キャリア形成」という5つを設定することに

なっています。この5つの研究テーマを実践するため、「異文化理解」「国際文化」「特設英語」「キャリアデザイン」という4つの学校設定科目を教育課程に設定して取り組む予定です。下の図をご覧ください。

江川 当面、来春の高1からSGHの「スーパーグローバルクラス」を新設、その中でSGH事業を展開していきます。定員は30名を予定しています。モデルクラスですね。現在は4つの学校設定科目のプログラム開発に取り組んでいます。このうち、「異文化理解」と「特設英語」については、すでにかなりまとまっています。宍戸 まず特設英語ですが、現在高1で週1回TOEFL対策の授業を試行的に始めました。目標はIBTスコア57点で、その指導方法の確立が研究開発の内容です。ただ、単なるTOEFL対策講座とはしません。元青山学院大学の教授を招いて、毎回アジアの人権問題をテーマとした授業を英語で展開、英語力だけでなく社会的なテーマに対する関心を喚起し、理解も図っ

## 構想全体概要ビジュアル資料

### 佼成学園女子中学高等学校



ていこう、という相乗効果を狙った内容です。異文化理解は、「異文化体験」「フィールドワーク」「プレゼンテーション」の3本柱の内容です。異文化体験でベースを作り、フィールドワークを通して課題を発見、研究し、最後にプレゼンテーションで仕上げる構成です。まず異文化体験は、今まで本校が積み上げてきた留学や国際交流の延長線上の内容で、異文化に触れて日本や日本人との違いを肌で感じる事が中心です。

フィールドワークは社会科で実施されているような取り組みですか。

宍戸 S G Hですから国内ではなく、場所はタイです。2年次に10日間、チェンマイなどでホームステイをしながら現地の大学と連携しての実施です。フィールドワークを通じて、生徒一人ひとりが自分の研究テーマを見つけ、帰国後、研究に取り組みます。

江川 タイでのフィールドワークは恵泉女子園大学と連携した取り組みで、大学生が高校生をサポートすることも出てくるでしょう。恵泉女子園大学はすでにタイでいろいろなフィールドワークを実施しています。文部科学省はS G Hで高大連携を絶対条件としています。中高だけで完結するようなプログラムではだめなのです。高校生でも大学生並み、あるいは大学生を上回るような成果を出してほしい、それが大学のグローバル化にもつながり、高大連携の成果、ということになると思います。

宍戸 フィールドワークでは現実の社会のあり方や社会問題を見て、聞いて、感じることで自分の研究テーマを見つけていきます。それは食文化かもしれませんし、民族問題かもしれません。多文化社会の課題も考えられるし、貧困問題の実情を探ることもかもしれません。フィールドワークの現場で見聞きすることだけでなく、10日間の滞在中のホストファミリーからうかがったお話をもとにテーマを決める生徒も出るでしょう。帰国後は各自が決めたテーマについ

て英語で研究を進めます。テーマを決める段階では、決めることが難しい生徒が出るかもしれませんが。テーマが大きすぎたり抽象的だったりして、当たり前結論しかでないようなこともあるかもしれません。こうした場合には生徒本人と相談、アドバイスを積み重ねてS G Hプログラムとして適切なテーマに決めさせていくようにします。

江川 研究の進め方は、図書館やインターネット等での文献収集が第一歩です。本校の図書館で対応できなければ恵泉女学園大のお世話になったり、公立の図書館を利用することもあるでしょう。ただ、それだけで海外の生の事情は分かりません。そこで、J I C E・日本国際協力センターのお世話にもなります。アジアからの留学生を多く受け入れていますから、留学生を紹介していただいて、必要に応じて直接インタビューすることも行います。

研究成果の発表はどのようになりますか。

宍戸 作成した研究成果は高3でまとめてプレゼンを行います。研究成果のまとめ方などは、ロンドン大学のS O A S校の指導で、実際に現地で行います。発表会形式ではなく、紙ベースですから、指導を受けて英語のエッセイを作り上げるようなイメージです。決めたテーマに沿って、生徒たちが積極的にあるテーマに取り組み、新しい解決策や答えを世界に向けて提案していく集大成の場です。

江川 S O A S校は“the School of Oriental and African Studies”の頭文字をとったもので、「東洋アフリカ研究所」と訳されます。イギリスでは唯一の地域研究に特化した教育・研究機関で、日本の政治、経済、言語、文化も研究しています。タイでのフィールドワークを通じて研究した成果について指導を受けるには最適です。すでに本校と提携していますから、体制づくりも十分です。

プレゼンも評価もつけていくわけですね。

宍戸 「異文化理解」も「特設英語」も教育課程に組み込まれた教科ですから、SOAS校でのプレゼンも含め、評価をつけます。評価方法も開発していきます。「国際文化」と「キャリアデザイン」の内容についても、近々詳しくお話しできるようになるでしょう。ただ、申請時の中身の具体化にすぐ取り組む準備をしていましたら、文部科学省からは指定後にさらに内容の追加の要請も来ていて、大幅な調整をしなければいけない部分が多数あります。

江川 日本人のアイデンティティーの育成についてもプログラムの中にきちんと位置付けてほしい、といった内容もありました。本校では中学でかたる大会も実施していますし、書写では様々なスタイルの書体を学ぶ中で、日本文化への理解を深め、豊かな日本語に親しみを持たせる指導も行っています。茶道も本格的な茶室で少人数で実施、専門の先生からお点前と礼儀作法を学んでいます。こうした取り組みは以前から伝統的に行ってきていましたので、いまさら、とも思いますが、成果を広めていくことを考えると、きちんと位置付けておきたい、ということなのでしょう。

スーパーグローバルクラスには、従来の佼成学園女子中高の入試とは別に、何らかの入学資格を設けていくのでしょうか。

宍戸 高校1年次から国際交流に取り組みますし、英語で行う授業も多くなります。現在の特進留学コースは週の授業の3割が英語で、ネイティブによるオーラルやリスニングだけでなく、作文のエッセイ力もつけています。リーディングの時間も多い。新設するスーパーグローバルクラスも同様の指導になりますから、こうした授業に対応できる英語力が必要です。中学から

の内部進学生には、十分な力を身に着けてこのクラスに入るように英語力を伸長する指導を行ないませんが、外部から希望する生徒には、入学時点で少なくとも英検準2級程度の力は求めていかなければならないと思います。

江川 文部科学省の意向としては、英語力を強化する教育内容の研究開発についてはSELHiで既に達成されている、これからは英語をツールとして使ってある種の社会問題を解決する力が求められる、こうした力を育成するプログラムを開発したい、ということですから、英語力は伸ばしていきますが、英語力そのものが目的ではありません。内進生はともかく、外部からの入学生については国数英理社を中心として、総合力を評価したいところです。本校のSGHで育てていく人間像は、直接的な英語力以外にも、大きな声でしっかり自分の意思を伝えられ、ロジック展開ができる、何よりも、どこでも寝られる、何でも食べられる、議論もできる、でも相手もしっかり認める人間です。直接的な英語力以外にも、こうした芽を持った生徒に来てほしいと思っています。

SGHの取り組みが軌道に乗った後は、どのような展開をお考えですか。

江川 まずはプログラムを開発し、来春スーパーグローバルクラスを立ち上げて実践し、成功させることが第一です。次はその成果を他のクラス、学校全体にも広めていきます。その次は本校と同じ法人の男子校、幼稚園や、さらに他校にも広げてければと思っています。そしてユニセフや国連などで活躍する卒業生が増えてほしいですね。国際社会の平和に貢献していける、平和社会を築く人材が一人でも多く育ててほしいと思っています。

ありがとうございました。

# 普連土学園の英語教育とネイティブ教員の視点

普連土学園中学校高等学校 校長 浜野 能男

英語科 Daniel Stifler

## 1. 普連土学園の英語教育の概要

普連土学園は 1887 年、当時アメリカに留学していた内村鑑三と新渡戸稲造の提言によって、フィラデルフィアのフレンド派(友会徒、クエーカーともいう)婦人伝道会の人々により創立された。当初から女子教育を目的とした学校で、130 年近くの間女子校を続けている。校名の「普連土」は、津田塾大学の創立者、津田梅子の父 仙氏により、FRIEND の語の音をとって、命名されたもので、「この地上の普遍、有用の事物を授ける」真理探究の場となるようにとの願いが込められている。

普連土学園の英語教育は、「中 1 で入学したときに最初の一步から始めること」を前提に、「英語で誰とでも進んでコミュニケーションを図る姿勢と、大学入試、さらにその後の学習で必要な読解力・語彙力・発信力を養成する。」として、中高 6 年間でグローバル化する社会で自ら主張し、発信できる英語力を習得するとともに、生徒一人ひとりが大学入試で志望校を突破できる力を養成することを目標としている。完全中高一貫で高校入学生がいないことから、独自のカリキュラムを実施である。

授業は 45 分×1 日 7 時間・週 35(高 3 は選択で 27~35)時間で、このうち英語は中 1~中 3 が各週 6 時間、高 1 は 7 時間、高 2・高 3 は必修 6 時間、選択 2~4 時間が配置されている。中 1~高 1 の英会話と高 2・高 3 選択の英会話、高 3 選択のコンポジションが少人数分割クラス、中 3 英語の一部と高校の英語表現・ライティング、リーディング、コミュニケーション英語 が習熟度別編成となっていて、中 3 英語と高校のコミュニケーション英語 はチームティーチングを取り入れている。

特に中学段階では、レッスン毎の確認テスト、ノート、課題の頻繁な提出、さらに放課後の補習、個人指導など、遅れる生徒を出さないためのきめ細かい指導体制をとっている。高 1~高 3 ではポキャブラリーテストを頻繁に実施、語彙力補習など、様々なアプローチで入試突破に必要な語彙を着実に身につけるほか、高 2 後半~高 3 のリーディングの授業では、最難関校の問題も多数含んだオリジナル教材を使用、高 3 になると入試問題演習を積み上げる。さらに問題別傾向・難易度別に補習を多彩に設置、大学受験での一人ひとりの志望校合格に必要な英語力を学校の力だけで養成している。

## 2. 英語を活用する環境を日常的に維持する取り組み

「大学受験での志望校合格」と、「自ら主張し、発信できる英語力」の両方を習得するには、特に中学段階初期から本場の生きた英語に触れること、日常的に英語を活用する環境を維持し、「活用する英語力」という基盤の上に大学受験を突破できる力を育成する必要がある。中 1 の最初からネイティブ教員による英会話(English)の授業を行い、生きた英語力が身につくようにしている。英語を話しながらネイティブ教員とともに昼食を摂るイングリッシュ・ランチや、英語だけを使って 3 日間生活するイングリッシュ・キャンプ、自分で参加したいアクティビティを選んで一日を過ごすイングリッシュ・チャレンジなど、日常的に楽しく英語を使う機会を数多く設定している。

また、普連土学園は日本で唯一のフレンド派の学校で、世界中のフレンド派の方々が来日した際

には普連土学園を訪問することが多いなど、日常的に海外からの来訪者が多い。キリスト教主義の学校として、毎日礼拝を行なっているが、欧米からのゲストによる英語礼拝も行なわれることがある。さらに、毎年インドネシア・フィリピン・ドイツ・スイス・アメリカなど世界各国からの留学生が普連土学園に来訪、生徒たちと共に学んでいる。こうした来訪者との交流の機会を多く設定することで、生徒が常に生きた英語に接する環境を維持するとともに、国際理解を深めることで、「どの国の人も尊重し、積極的に交流を持つ姿勢を養う国際理解の教育」という普連土学園の大きな教育の柱にもなっている。

海外研修は高1、高2の希望者対象に、夏休みに「ジョージ・フォックス・ツアー(クエーカーの創始者、ジョージ・フォックスの足跡をたどる)」として12日間実施している。語学研修だけでなく、フレンド派の探訪、現地の人々との交流、英国文化理解のプログラムである。海外留学は、海外のフレンド派の学校との長期(1年)・短期(夏期)留学制度(オーストラリアのホバート・フレンズ・スクール)を実施している。生徒だけでなく、米国インディアナ州のアラム大学とは定期的な教員交換制度があり、同大学教授による生徒向けの特別講義なども実施している。

### 3. 普連土学園でのネイティブ教員の役割とその効果

日常的には各学年の英会話の授業(English)を担当している。生徒たちが生きた英語に触れるだけでなく、英語に自然な形で触れていくことを通じて、英語に臆する気持ちを乗り越え、積極的に英語でコミュニケーションを図る姿勢を養うことが狙いである。普連土学園のネイティブ教員の授業は、長年の蓄積に毎年工夫と改良を重ねたオリジナル・メソッドによるもので、ゲームや劇のロールプレイングなど、体全体を使って英語を使うアクティビティが豊富に盛り込まれている。近年の技術の進歩で、オリジナル教材も紙媒体のものばかりでなく、映像教材も制作しており、ネイ

ティブ教員による工夫が詰まっている。映像教材は映像そのものでの授業展開用の内容だけでなく、お手本としての利用、リスニング練習などのプログラムである。

課外活動では前述のイングリッシュ・ランチ、イングリッシュ・キャンプ、イングリッシュ・チャレンジがネイティブ教員の主担当で、ドラマやスピーチなどのイングリッシュ・チャレンジのアクティビティの作成も担当している。英語で日記を書いてネイティブ教員に添削してもらっている生徒もいて、生徒は添削を通じたネイティブ教員とのやりとりを楽しんでいる。

最近、生徒に人気があるのはスキット(寸劇)の作成・実演で、自分たちで作成したスキットを、自分たち自身でタブレットを使って動画撮影していて、なかなかの出来栄である。こうしたこともネイティブ教員のリーダーシップで実践している。動画撮影は、制作している生徒たち自身だけでなく、作品を下級生に見せることで、下級生の英語への親しみが増すなどの波及効果も認められる。

ネイティブ教員は日本の大学受験にはあまり関係がないと思われがちだが、新傾向の入試問題にも対応して、高2、高3では選択で少人数の科目を設置、担当している。英作文や時事問題のディスカッションなど、実践的でレベルの高い授業を行っている。この他、スカイプや映像の交換での海外交流、海外からのゲストを招いたイベント、海外研修や留学希望者への対応など、普連土学園の英語教育や、英語を用いた様々な取り組みで大きな役割を果たしている。

### 4. 「最初の一步から」の英語習得で、ネイティブ教員が課題だと思っていること

Learning a language is a holistic process that goes beyond the academic task of acquiring and being able to reproduce information about a subject. Students need to develop social skills and communication skills in order to be able to communicate successfully with others.



They need to become interested in the wealth of knowledge that being able to understand English gives them access to. And they need to be comfortable and confident using English so that they can have the poise required to communicate successfully.

In order to achieve mastery over English, it is necessary for students to have sufficient opportunities to use English for meaningful communication. I see our role as teachers as similar to that of curators in an art gallery. We find and create situations and materials which allow students to engage with English. As much as possible, we focus on actual communication between the students and English speakers, both our English teachers and also guests to the school. Class materials focus on presenting the students with examples of real language use. We create videos of native speakers using English in authentic situations and develop activities to help the students process that language and make it their own.  
(和訳)

言語の習得は、ある教科についての知識を獲得し、それを再現するといった学習行為に留まらない、人間全体の包括的な行為である。生徒は、相手と上手にコミュニケーションを行えるようになるために、人と接し、意志を伝えていく技術を身につける必要がある。生徒は英語を理解することによって知りうる多くのことがらに興味を持つことが求められる。また英語を書き、話すことを楽しみ、自信を持つことで、上手に意志を伝達するための心構えができる。

生徒が英語を習得するために、彼らが英語を使う機会を、意味のあるコミュニケーションの場にする必要がある。我々の役割は、美術館の学芸員に例えられる。その役割は生徒が英語に没入できる環境と、材料を見出し、準備してやることである。生徒が、外国人教員のみならず来校した外国人とも、実際にコミュニケーションを行える場

を最大限設けるよう努力している。外国人教員が、実際に英語を使う状況をビデオ教材にしているが、生徒が自分で工夫して英語を使い、英語を自分自身のものができるような活動をさらに推し進めていきたい。

## 5. 普連土学園の英語教育の成果事例

I measure our success in pursuing that goal by the degree to which students actually succeed in communicating in English. That communication might be something as simple as a seventh grader having a short conversation with a foreign guest to our school, or as sophisticated as a graduate going on to have a career at the Ministry of Foreign Affairs. When I talk with graduates of our school, I am consistently impressed by their ambition to use English in their lives. Almost everyone I talk to has studied or lived overseas and many are using English for work. What 's more, they seem to be enjoying using English and their ability to speak English enriches their lives. For me this is evidence of the success of the English program at Friends School.

(和訳)

上記の課題の達成度を測る尺度は、生徒が実際に英語でのコミュニケーションを円滑に行っているかである。それは、中1の生徒が来校した外国人と交わした短い会話から、卒業後外務省で勤務することを目指せるほどの高度なものまで、幅広いものを意味するが、普連土学園の卒業生と話す際にいつも強く感じることは、生活の中で英語を使っていきたいという強い意欲である。今までに自分が話した卒業生のほぼ全員が、留学や海外で生活した経験を持ち、その多くは英語で仕事をしている。さらに、その卒業生達は英語を使うことを喜びとしており、英語ができることによって、その生活がより豊かなものとなっている。これこそが普連土学園の英語プログラムの成果を示すものと自分には思われる。

## 男子校の英語教育と「成城版グローバル教育」

成城中学校高等学校 校長 栗原 卯田子

ききて 編集部

成城中学校高等学校の英語の基本方針からお願いします。

本校は 1885 年に創設された文武講習館として創立され、翌年成城学校と改称し、当時の陸軍士官学校、幼年学校への予備教育を実施しました。現代で言えば、難関大学を目指す教育にあたりません。当時から進学校だったわけです。こうした伝統がある本校の英語教育は、大学受験で生徒一人ひとりが自らの目標をしっかりとクリアして、自信を持って大学に進学するように力をつけていくことが基本的な目標です。2007 年度の入学生から中高一貫校用テキスト「TREASURE」を採用しました。現在は改訂版の「NEW TREASURE」です。このテキストで中 1～高 1 の 4 年間に、大学受験の文法事項すべてと大量の語彙を身につけます。特に高校入学生は、1 年間で高校の文法をすべて身につけますからかなりの学習量になります。

その上で、高 2 では大学入試に向けた英文読解力の養成に主眼を置き、短文レベルで文の構造を理解することから、パラグラフや文章全体の内容理解を目指していきます。英作文では英文法を再確認しながら、書く力の養成を目指して和文英訳から自由作文まで様々な状況でのライティングを強化しています。高 3 では入試に備えての演習が中心で、センター対策、長文問題集など、様々な教材を使いながら実践的な力を身につけています。

進学校の受験英語ですね。

もちろん、大学受験で高得点をとることだけが英語教育の目的ではありません。中高一貫 6 年間の教育の観点から、バランスの取れたカリキュラ

ムを目指しています。中学では特に「聞く」「話す」という技能に重点を置き、コミュニケーション能力の土台を作ります。高校では中学で学んだものをベースに、大学進学を重視した総合的な英語力の育成に力を注いでいます。また、英語は積み上げですから、特に高校段階では自分で勉強できる環境作りも重視しています。

中 1 の最初の 8 時間ほどは完全に音声に特化した内容で、その後も英語の音声に徹底的に慣れさせ、徐々に身の回りのことなどを表現できるようにもっていきます。中学は 3 学年とも週 6 時間の英語のうち、1 時間をネイティブ教員と日本人教員とのペアによる英会話の授業としていて、中 2 では様々な題材を利用して自己表現力を養成し、中 3 では中学の集大成として、Speech や Show and Tell などのプレゼンテーションを通して、自分の意見を言えるように育成しています。「NEW TREASURE」のコミュニケーション力の単元ばかりでなく、ネイティブ教員作成の独自教材も活用しています。

特に男子校だと、なかなか英語に関心を示さない生徒もいるのではないのでしょうか。

生徒一人ひとりの学力差はあります。特に英語だから、というわけではありません。成城生は昔から、おっとり、のんびりしている生徒が多いこともあって、放課後補習だ、定期考査の補習だと、指名される生徒もいます。男子は女子よりも口が重く、思ったことをすべて表せない生徒が少なくありません。教員はしっかり観察している必要があります。教員同士で分担し、学年の教員団の中で情報を交換、生徒とコミュニケーションをしつ

かりとすることで、英語嫌いにさせないことがまず大切で、定期テストに対する英語力は、「こう勉強するのが普通なのだ」と信じ込ませてあげることが必要です。

高2・高3は入試対策ですが、男子校の特色として、男子だからこそ負荷をかけられる、という面はあります。高2・高3で今までの分を取り返して大きく伸びるケースです。男子の場合、「やらなきゃいけない」という義務感が芽生えると、乗り越える力は強いものがあります。受験に対して少し後ろ向きの場合も、これで前に進みます。中学時代はのんびりしていても、後半は追い上げる生徒が多いのは、「男子校だから」という面はあるでしょう。

英語の楽しさの面からはいかがですか。

英語はツールですから、英語を使って何かに取り組むことが「楽しい」と感じることは、英語の学習を進める上で大切です。成城生の中には、やりたいことがきっかけで英語に目が行く生徒も少なくありません。目的意識に目覚めて、英語に一生懸命取り組んで、海外の大学に進んだ生徒もいます。ただ、これから社会に出る生徒たちが求められる力を考えると、もっと早い時期から、自分から進んで楽しみながら英語に取り組むことができる環境は必要で、こうした積極的な英語の場を通して、より高度な活用力が身につくと考えています。

「活用できる英語力」の育成ですね。

「活用できる英語力」はこれからの社会で生きていくための技量の1つです。早い時期から積極的に取り組んでいた生徒はそれだけ上達の機会も広がります。そこで、本校では新しいプログラムを始めました。昨年(2013年)から開始したのが中3～高2を対象とする「エンパワーメント・プログラム(Empowerment Program)」、もう1つは今年(2014年)試行した中1対象の「グローバル研修」です。両方とも「成城版グ

ローバル教育」を構築していく一環です。

「エンパワーメント・プログラム」からご説明ください。

カリフォルニア大学デービス校国際教育センター長の藤田斉之先生が開発した、自己啓発型の体験プログラムです。企画(project)・議論(discussion)・発表(presentation)を通して、英語力の向上だけでなく、自己理解や異文化理解を促すのが目的で、生徒5～6名を1チームとし、各チームにカリフォルニア大学の大学生や大学院生が1名ついて、決められたテーマについてチームごとに英語で議論し、最終日には自らの成果を英語でプレゼンテーションするものです。約40,000円の費用がかかる希望参加制の取り組みで、夏休みに校内を使って5日間連続で実施しました。参加した生徒は、コミュニケーションのための英語の習得だけでなく、自分の考えを持つことの重要性や自分の意見を発表することの難しさ、大切さを学んでいます。各チームについて大学生・大学院生の学問への取り組み姿勢や向上心も大きな刺激になっています。昨年は初めての実施でしたが、参加した生徒の満足度が非常に高かった取り組みで、今年も夏休みに実施します。

特に今年は、開発した藤田斉之先生ご自身が6月21日(土)に本校に来校され、成城生に講演してくださいました。「グローバル時代に最も必要なのは人間力だ」「受動態をやめよ」「自分を信じて選択をすること」など、様々なメッセージを発信してくださいました。当日は生徒だけでなく保護者、教員も含め、総勢300名を超える参加者がありましたが、講演終了後、生徒たちが列をなして先生に質問していました。その姿を見ると、今年は昨年以上に実のある「エンパワーメント・プログラム」が期待できるでしょう。

「グローバル研修」についてもお願いします。

中1が全員参加する取り組みで、5月31日(土)

と6月1日(日)に校内で実施しました。「エンパワーメント・プログラム」の成果を踏まえたもので、生徒約10名をチームとして、ここに今回特に招聘したネイティブ教員を1名ずつ担当させて2日間英語のみでプログラムを実施するものです。招聘したネイティブは全部で28名で、費用としてご家庭に12,900円ご負担いただいています。若いうちから異文化の環境に身を置く体験が大切であると考へて企画した取り組みです。

初日の朝のオープニングセレモニーでは、生徒たちの表情に緊張が見られましたが、すぐに男子校らしい「のりのり」の笑顔に変わり、無理なくプログラムに入っていました。初日が終わって帰宅するときには、朝とはすっかり表情が違っていました。翌日の午後は保護者を招いての発表会です。中1ですからそんなに高度な発表ではありませんが、多くの保護者がわが子のスピーチを聞いて驚いたり、感激したりしている様子でした。最後のクロージングセレモニーでは、発表を終えた安堵感も加わって、生徒たちは生き生きした笑顔と態度で、ネイティブの先生方との別れを惜しんでいました。

実施後のアンケート結果はいかがでしたか。

まず、生徒アンケートでは、「外国人講師に自分が言いたいことを伝えることができた」(88.2%)、「生の英語に触れることができてよかった」(90.5%)、「もっと英語を話せるようになりたい」(95.0%)など、生徒は楽しく学んだことがわかります。英語に対していま一つ積極的になれない生徒はいますが、こうした生徒を英語嫌いにしたくはありません。楽しく思わせることで、英語学習への動機づけや意欲向上に繋げることができます。今回の取り組みでは、英語の入口段階で少し変化を起こすことができたのではないかと思います。

保護者アンケートは、生徒の発表を参観された方と参観されなかった方に分けて集計しました。下の表です。保護者も満足度が高いことがわかりました。積極的な評価ではない回答でも、「日常的にやってほしい」「もっと長時間やってほしい」といったご意見があって、多くの保護者に支持されたと思います。また、「エンパワーメント・プログラム」への参加希望も多く、期待の高さに驚きを感じました。

〔グローバル研修保護者アンケート 回収率88%〕

中1全員参加でこうしたプログラムを実施することをどうお考えですか。費用が12,900円であることを考慮してお答えください。

	良いと思う	必要ないと思う	どちらとも言えない
参観した保護者	93%	1%	6%
参観しなかった保護者	80%	5%	15%

来年度(ご息が中2になったとき)もこの行事があるとよいと思いますか。

	そう思う	希望制ならよい	そう思わない	どちらとも言えない
参観した保護者	89%	7%	1%	3%
参観しなかった保護者	84%	11%	1%	4%

中3~高2の希望者を対象に「エンパワーメント・プログラム」(費用約4万円)を実施しています。今後、ご息を参加させたいと思いますか。

	参加させたいと思う	参加させたいとは思わない	どちらとも言えない
参観した保護者	87%	0%	13%
参観しなかった保護者	74%	0%	26%

グローバル化といわれますが、日本人の留学生が減少するなど、内向きが目立っています。

親御さんご自身がグローバル化に躊躇している面はあるでしょう。グローバル社会はご自分たちが経験してきた環境とは全く異なる社会ですから、親御さん自身が踏み出しにくいのでしょう。だから、今の日本の若者は海外に目を向けにくいのもかもしれませんね。でもグローバル研修のアンケート結果から、成城生の保護者はもっと前向きです。ご子息への接し方も、決して庇護することばかり考えて接しているわけではありません。機会を捉えて挑戦させたい、というご家庭が多いです。

大切なことは、目的が英語でコミュニケーションをとれることだけに特化してはいけない、ということです。日本で毎日暮らしているだけでは気づかないことが、文化の異なる人と触れ合うことによって認識されることは多々あります。異文化の人との交流はとても貴重な体験ですが、自分が気づいたことをそのままにしないで、さらに高めていくことがより大切です。「これから」自分はどうようにしていこうか、自分で考えることです。このような取り組みに本気で挑戦し、自分で考え

る生徒は、いずれ海外に出て、自分の目で外を見たいものだと思います。それが在学中でも卒業後でも問題ではありません。海外に出て、見て、聞いて、話して、考える、そして広い視野を身につけてくれるでしょう。

成城中学校高等学校の今後の取り組みについてお願いします。

今、本校の教員の中に、日常的な教科指導で新しい取り組みができないか、あるいは、大きな取り組みとしては、「スピーチコンテストを実施したい」「グローバル研修を試行から本格実施に」など個々に様々な意見が出ています。特に「グローバル研修」は、「エンパワーメント・プログラム」につなげていく1つの流れとして実施すると、「エンパワーメント・プログラム」の充実につながるでしょう。それぞれ意義や効果を1つ1つ検討して、グローバル時代の男子教育のあり方を探求していきます。受験英語はもちろん基本ですが、その上で人間力を育てる「成城版グローバル教育」を発展させていきたいと思っています。

ありがとうございました。

#### <お知らせ>

「E-REPORT」は、小社データ課から教育関係の皆様向けに配信している「ENニュース」の不定期増刊号で、毎回、いろいろなテーマを取り上げ、第一線の先生方・専門家の皆様方のご協力をいただきながら、問題提起と経験交流の場となるべく、努力していきたいと考えております。「ENニュース」は10日に一度の配信で、首都圏を中心とする中学・高校入試関係や学校関係の話題、時にはPISAの話題なども取り上げているニュースです。

「ENニュース」「E-REPORT」とも、現在のところ無料のメール配信版のみです。塾関係の皆様には小社コンテンツ事業本部の営業担当者から、学校関係の皆様には小社ソリューション事業本部の営業担当者からお送りしておりますが、教育関係の皆様を中心に、制作しているデータ課からも直接配信を行っております。配信のご希望は、小社の営業担当者にご連絡いただくか、巻末記載のデータ課担当者までメールにてご連絡ください。

# 本校のSEC(スーパーイングリッシュコース)の 取り組みとネイティブ教員の役割

目白研心中学校高等学校 教頭 長谷 良一

## はじめに

本校は1923年に男子校の研心学園として設立され、1944年に女子校に転換、目白女子商業学校となった。戦後の学制改革で目白学園中学高等学校となり、2009年には現校名に改称して共学校として新たなスタートを切った。本校は、女子校だった2002年に文部科学省から第1期スーパーイングリッシュランゲージハイスクール(SELHi)に指定されたが、当時は全国で3校選ばれた私立高校の中の1校だった。このように、本校は早い時期から、実践的で高度な英語教育に取り組んできた歴史と実績がある。この実績のさらなる発展をめざして、2014年度から新たにSEC(スーパーイングリッシュコース)を新設した。本稿ではSECの概略と、同コースでのネイティブ教員の役割について紹介する。

## 1. コース編成

中1	中2	中3	高1	高2	高3
	特進コース	特進コース		特進 文系	
				特進 理系	
		SEC(スーパーイングリッシュコース)			
	選抜コース	選抜コース		選抜 文系	
				選抜 理系	

図は、2014年度からの本校のコース編成である。本校は中学からの一貫生の募集と高校入学生の募集を行っているが、昨年までは中1～高3まで、特進と選抜の2コース制で、高2・高3では特進と選抜がさらに文系と理系とに分かれていた。2014年度からは中3に新たにSECを設置している。一貫生は中3に進級する段階で希望と成績によってSECに

移ることができる。来春からは、高校募集でも特進・選抜コースと並んでSECも募集する予定である。SECの高校入学生は、入学当初から同コースで学んでいく。

## 2. SECの概要

本校では「グローバル化」を、「国家の枠組みを取り払い、物質や人材が自由に移動すること」と考えている。今後の中学・高校での教育には、こうした社会で生きていくのに必要な知識や技能の土台を習得していくことが求められている。このため、高校在学中に海外の高校生と対等に議論できるようになることを、SECで身につける技能・教養の目標として設定した。

対等に議論するには英語会話力はもちろん、世界の状況や日本の文化にもしっかりした知識・教養を持ち、相手の発言を瞬時に理解して、論理的な意見を組み立てて英語で発言できることが必要である。また、人々の多様な価値観を認め合いながら議論を進め、新しいものを創りだして行くリーダーシップやファシリテーション力も必要だ。そこでSECでは在学中の英語力目標をTOEFL iBT80点(PBT550点)以上とした。

独自科目として「Academic Reading」、「Academic Writing」、「Paragraph Writing」、「第2外国語」、「世界事情」を実施する。また、iPadを日常的な学習、生活のツールとして活用、議論・調査・発表型の授業展開を増やしている。海外研修は中3でカナダに3週間、高2ではニュージーランドで約2ヶ月の2回実施する。

SECの英語の授業は「Smart Program」を導入していることが大きな特色だ。従来の知識先行型の英語学習を、実際に活用するための英語学習ヘシフト

することが目的である。このプログラムはカナダの語学学校が開発した英語学習用のもので、それ自体がシラバスとなっており、外国人が英語を第2言語として学習する観点で作られている。例文や題材も生徒たちが親しみやすい内容で、初級から上級まで教材が揃っており、英語の4技能をバランスよく構成させている。また、意見交換や発表などの、発信力を伸ばすタスクも、頻繁に、効果的に組み込まれている。

2014年度の中3では週に7時間ある英語の授業のうち、3時間は日本人教員が担当(科目名「Use of English」)し、残りの4時間をネイティブ教員が担当(科目名「Global English」)している。取り扱うUnitは同一で、主に文法は日本人が、読解はネイティブの担当となっている。英語を使って意見を発表したり、プレゼンテーションをする機会はどちらの授業でも行っている。また、日本人教員の授業では、教員が文法や語彙の知識を教えるのではなく、生徒が自宅で学習してきたことをクラスで発表する形式で、その後に個人で問題を解答し、教員が添削する形で授業を進行している。なお、この他にネイティブ教員担当の「Speech&Drama」を週1時間実施している。

### 3. SECでのネイティブ教員の役割

上記のように週4時間の「Global English」と週1時間の「Speech&Drama」がネイティブ教員の担当である。SECは海外の高校生と英語で対等に話すことを目標としているため、自分が話していることがネイティブにどのように受け取られるかがかなり重要である。ネイティブの授業は、とにかくただ楽しむだけの英会話と思われがちだが、「Global English」では、実際は映像を観て意見交換をしたり、テーマに沿ってプレゼンを行ったりしている。ネイティブはWeb上にある「Smart Program」のテキストや映像を見て、「どう思うか」を生徒に問いかける。その返答に対して、「この場合はこういう言い方をすることが普通だ」とか「こういう表現を付け加えるともっと強い表現になる」といった、実際に英語を使っているからこそそのアドバイスをタイムリーに行

なっている。

週1時間の「Speech&Drama」は7時間目を使った取り組みで、英語での表現力を養うことを目的としている。1学期は「Drama」のレッスンを行い、秋の桐陽祭(学園祭)で英語劇を行い、成果を発表する。2学期は「Speech」のレッスンを行い、集大成として2月にスピーチコンテストを実施する。

このように、ネイティブ教員には教室で「英語を使うことが必然」と生徒に感じさせるムードを作り、生徒に英語で考えさせる習慣を身につけさせ、活用できる英語力を高めていく、重要な役割を担っているが、同時にSECが重視しているもう1つのテーマ、「文化の違いを理解し、受け入れる姿勢の育成」にも大きな役割を果たしている。例えば、あるトピックをめぐる議論している時、「アメリカでは多くの人がこう考える」といった、日本人の生徒同士とは異なる視点での発言を生徒に投げかけ、自分たちとは異なる文化を持つ他者がいることを現実として理解するよう指導している。異文化理解と受容の促進である。

SECは、現在中3だけのコース設定で、来年度以降学年進行で順次上級学年に展開していく。次のページの表は、高1~高3での語学系のカリキュラム予定で、「コミュニケーション英語」と「Speaking Out」,「Academic Reading」,「Academic Writing」,「Paragraph Writing」等を担当する予定だ。

### 4. 本校がネイティブ教員に求める資格、資質と採用

本校ではSEC以外のコースでも英語の取り組みは盛んで、校内スピーチコンテストの実施や、生徒のスピーチ指導、中3のカナダ修学旅行のための事前学習プログラムの実施など、ネイティブ教員が果たす役割は大きい。また、英語好きな生徒が多いことから、クラスに合わせて工夫しながら授業を行っていて、今までもその功績は大きかった。したがって、本校のネイティブ教員採用では、それなりの資格、資質を求めている。

## SEC高1～高3の語学系カリキュラム予定

教科	科目	高1	高2	高3	備考
外国語	コミュニケーション英語	3			ネイティブ担当+日本人
	コミュニケーション英語		4		ネイティブ担当+日本人
	Academic Reading			4	ネイティブ担当
	Paragraph Writing	2			ネイティブ担当
	Paragraph Writing		2		ネイティブ担当
	Academic Writing			2	ネイティブ担当
	TOEFLリスニング		1		高1対象で放課後講習も実施
	TOEFL講座(外部)			2	高1高2対象で放課後講習も実施
	Exam Preparation			2	
	Speaking Out	2	2	2	ネイティブ担当
	情報		1		情報検索・eメール等
	ニュースペーパー・イングリッシュ			2	
	第二外国語(中国語)			2	
総合	Presentation & Facilitation			2	

募集はインターネットを利用して独自に採用広告を出している。本国で教員免許を持っているか、または長期研修を受け、ESL指導者としてのQualificationを取得していることが応募資格となっている。QualificationにはTESOL、TEFUL等があるが、特に何かを指定しているわけではなく、中には独自のもの持ってくる応募者もいるが、一番多いのはやはりTESOLである。応募者は書類選考と2回の面接で選考している。日本での教壇経験の有無は応募資格にはないが、経験があればなお望ましい。

## 5. SECの進路目標

SECではこの他にも週2時間の国語表現で、日本語でのディベートやプレゼンテーションの技術、思考法を身につけ、論理的な文章を書く練習を積み上げている。また、中学生全員で実施している研究論文作成では「海外との比較をする視点(章)」を極力持つよう指導、さらに週末課題やロングホームルームでは、比較文化を学ぶとともに、グローバル教育の教材を用いて、グループでのディスカッション

を取り入れながら他民族・多文化への理解を深めている。TOEFL iBT80点以上の英語力と、こうした取り組みを通じて、海外であればアメリカ大学ランキング100位以内をはじめとする各大学、国内であれば慶應大学SFC、早大国際教養学部、ICU、上智大外国語学部、同国際教養学部、法政大学グローバル教養学部、国際教養大学など、海外での活躍をめざして、すべて英語で授業を行う大学・学部への進学を目標としている。そして、こうした大学でグローバル人材に求められる実力をさらに磨いて、世界で活躍する目白研心卒業生になってほしい。こうした願いをこめて本校はSECでの教育に取り組んでいる。



# TEAP 第1回公開試験を終えて

公益財団法人 日本英語検定協会 制作部部长 本間 充

## 1. TEAPとは

7月20日、第1回TEAP(ティープ)が実施され、全国7都市の会場で約3,000名が受験した。

TEAPは、「Test of English for Academic Purposes」の略で、英語で資料や文献を読む、講義を受ける、意見を述べる、文章を書くなど、英語を使った大学での学習・研究活動に必要な運用力を、正確に測定する目的で開発されたテストである。

大学のグローバル化が進んでいる。英語で行なわれる講義が増えているだけでなく、与えられた課題に対して学生各自が調査し、英語で議論しながら解決策を見出していく演習型の課題解決学習も増えている。昔からの伝統的な、日本語による一方通行型の講義だけでは、学生にこれからの時代に求められる実力を養成しきれないと、大学も自覚しているからではないか。多くの大学で英語運用力向上のための講座や施設を設けたといった話も聞く。また、1年間の海外留学を義務付けるなどの取り組みが増えてきている。このように、英語での学習・研究活動を実践していくには、大学としても受験生が入学する時点で、「大学教育のレベルにふさわしい英語力」を身につけているか、見極めておく必要が出てくるだろう。しかし、「ふさわしい英語力」の測定に有効で、しかも学習指導要領を土台としたテストは存在しなかった。そこで、「日本のようなEFL環境における英語による大学教育」を前提とした、アカデミックな場面での英語運用力の測定に特化して開発されたのがTEAPである。

## 2. TEAPの概要

TEAPは利用者の総合的な英語力を正確に測定するため、「Reading」「Listening」「Writing」「Speaking」の4技能のカテゴリーで構成した。

- ・Reading test:マークシートによる択一選択方式(時間:70分)
- ・Listening test:マークシートによる択一選択方式(時間:約50分)
- ・Writing test:解答用紙への記述方式(時間:70分)
- ・Speaking test:1対1の面接方式(時間:約10分)

出題は、英語で講義を受ける、英語の文献を読み解く、英語で発表を行うなど、留学も含む大学教育で遭遇する場面を想定した内容である。海外留学経験がなければ答えられないような出題や、企業における実務で求められるような内容は一切出題していない。英検との関係では、英検がジェネラルな英語力の検定試験であるが、TEAPはあくまでもアカデミックな英語運用力に特化した出題である。本稿の末尾に問題構成一覧を紹介している。

難易度の目安は英検準2級~準1級程度、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages 2001年に欧州評議会から公開)によるバンドではA2~B2に相当する。英検1級、CEFRではC1だとTEAPでは難易度の上限にあたる。

受験者の選択肢を広げるため、年間複数回実施する。2014年度は年3回(7月・9月・12月)である。「Reading」と「Listening」は1つのセットとして、3回とも全国7都市(札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡)で実施するが、「Writing」は9月と12月に、「Speaking」は12月に、それぞれ東京と名古屋において人数限定で実施する。このため、異なる機会にテストを受験しても統一した尺度で試験結果を比較できるよう、項目反応理論に基づいたスコアを受験生にフィードバックする。受験生にはテストスコアとともにCEFRのバンドによる成績も表示、また、「Can-do statements」も提供する。これは、大学レベルの

アカデミックな場面での英語運用に特化したリストで、現在の英語力で、大学での学習・研究活動で「具体的にどのようなことができるか」の可能性の目安を示したものである。

なお、良質な問題を確保するため、実際に出題した問題は非公開としている。しかし、決して秘密主義ではなく、サンプル問題を公表している。また、各出版社がTEAP教材を作るのは大歓迎である。いろいろな教材が出版され、TEAPが浸透し、広がっていくことを願っている。

### 3. TEAPの開発にあたって

TEAPは上智大学言語教育研究センター長の吉田研作教授のリーダーシップのもと、同大学と本協会が共同開発したテストである。日本人の弱点と言われる「Speaking」と「Writing」については、特にイギリスのベッドフォードシャー大学の研究機関であるCRELLA (Centre for Research in English Language Learning and Assessment)に監修をお願いした。

高校の学習指導要領は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」ことを目標としているにもかかわらず、高校での、特に大学受験に向けての英語指導では、和文英訳や英文和訳に重点が置かれ、バランス良く4技能が指導されていない。開発にあたっては、こうした現実を踏まえて、単に4技能を測定するだけでなく、このテストの広がりを通じて、高校の英語教育を学習指導要領の目標に近づけていきたい、という願いをもって進めた。

また、高校教員423名、高校生3,868名、都内の某私立大学英語教員19名を対象に大規模なアンケート調査を行い、高校における英語教育の現状と、TEAPが関係する英語教育への波及効果についての調査を行った。高校教師と高校生の反応を中心に、簡単に結果を紹介する。

- ・現状の高校における大学入試に向けた指導では「Reading」が他の技能よりも優先されている。

- ・高校教員、高校生ともに、大学での英語は、大学入試で出題される範囲よりも幅広いスキルが必要であることは理解している。

(「Listening」「Writing」「Speaking」)

- ・高校教員、高校生ともに、大学入試での出題が高校の英語の学習に影響を及ぼしていて、大学入試が変化すれば教育現場も変化すると考えている。
- ・高校教員、高校生は全般的に、TEAPが行なう取組み(4技能を重視すること、テスト問題の標準化、試験結果について受験者へのフィードバックなど)を肯定的に捉えている。
- ・調査結果では、特に高校生の間で「Speaking」のテストについて賛成の割合が低い結果が出ている。何らかの抵抗感を抱く人がいる可能性がある。

タスクの有用性や、入試での「Speaking」、「Writing」の導入等について肯定的な回答があった一方で、TEAPの目的達成には、テストの設計がよいというだけでは十分ではなく、開発と並行して積極的な告知活動・情報開示を行なっていかなければならぬことも見えてきた。そこで受験生や高校教員、大学関係者などに情報を提供し、広く認知してもらうために説明会を十分に開催する、サンプル問題の体験受験を行なう、テストの仕様に関する情報や問題構成、開発過程で研究したデータなどをウェブサイトで随時公開していくなどを行なっていく予定である。

### 4. TEAPの受験状況

7月20日に実施した第1回は、前述のように全国で約3,000名が受験した。230万人が受験する英検に比べたら微々たる人数であるが、率直なところ、後述の上智大学の「TEAP利用型入試」の定員枠は384人。他大学の特別入試枠を考えても、数は正直期待していなかった。それが3,000名になったのだ。第1回としては上出来だと考えている。本稿執筆時点では採点処理が進んでいる最中だが、処理が落ち着いたら得点分布を分析し、さらなる質的向上を図っていく。

## 5. TEAPを採用する大学

上智大学の2015年度入試では、いわゆる従来型入試と全学統一型の「TEAP利用型入試」が併存する形となる。後者の「TEAP利用型入試」では、事前にTEAPを受験し、(国際教養学部を除く)各学部学科が指定するスコアを満たしていれば出願できる仕組みである。2月3日(火)の試験当日には英語はなく、学科の指定する選択科目を受験する。2015年度入試では「Reading」と「Listening」の合計で、学部学科ごとに90点～145点がスコアとなっている。

この他、中央大学商学部英語運用能力特別入試、同経済学部推薦入試、立教大学異文化コミュニケーション学部・経営学部の自由選抜入試、関西大学外国語学部のAO入試・SF(スポーツ・フロンティア)入試・指定校推薦入試・併設校卒業見込者特別推薦入試、立命館アジア太平洋大学のアジア太平洋学部と国際経営学部のAO入試で活用されている。

TEAP採用大学も当初の予想よりも多く、TEAPの意義を理解していただき、嬉しく思う。

しかし多くの大学では、まだまだ様子見の段階なのだろう。採用大学で、TEAPを利用して入学した学生たちの英語の成績が、入学後、どのように推移するかを大学は着目しているのかもしれない。機会があれば追跡調査もしたいと考えている。

## 6. 今後に向けて

高校教育の充実の上に大学教育の充実がある。大学教育のグローバル化が進展し、英語で実践的な学問に取り組むことが日常的に見られる日も近い。TEAPは生まれたばかりで、普及も、目標とする「高校の英語教育を変えていくこと」も、スタートラインに立ったばかりだが、高校教育の改善とグローバル化時代の大学教育の充実に有効なテストであると信じている。

本協会も高品質のテストを提供すること、広く普及を進めることに今後も努力していく。各高校におかれても、グローバル化時代の大学教育にふさわしい生徒の育成に、英語で学問のできる生徒の育成に向けて、ご尽力いただければ幸いである。

## TEAPの問題構成一覧

### Reading(100点満点)

試験時間 70分 問題数 60問 解答はマークシートによる択一選択方式

大問	問題形式	ねらいと特徴
Part 1 (20問)	語彙・語法	大学での授業や資料・文献などを理解する上で必要とされるアカデミックな語彙力
Part 2A (5問)	図表の読み取り	授業や資料・文献などにおける視覚情報の理解とそれに基づく類推
Part 2B (5問)	掲示・Eメールなどの読み取り	学業に関わる掲示・Eメールなどにおける情報の理解
Part 2C (10問)	短い英文の読み取り	教材や資料・文献などにおけるパラグラフ単位の英文理解
Part 3A (8問)	長い英文の読み取り	教材や資料・文献などにおける英文の文脈や論理の流れの理解
Part 3B (12問)	長い英文の読み取り (図表も含む)	教材や資料・文献などにおける英文の詳細理解(図表も含む)

## Listening(100 点満点)

試験時間約 50 分 問題数 50 問 解答はマークシートによる択一選択方式

大問	問題形式	ねらいと特徴
Part 1A (10 問)	短い会話の聞き取り	学生として遭遇する可能性の高い相手とのやりとりの聞き取り(例:教授、アカデミック・アドバイザー、留学生など)
Part 1B (10 問)	短い英文の聞き取り	講義(ミニ・レクチャー)や報道情報などの聞き取り
Part 1C (5 問)	短い英文の聞き取り	図表の理解と組み合わせた英文の聞き取り
Part 2A (9 問)	長い会話の聞き取り	学生として遭遇する可能性の高い相手とのやりとりの聞き取り(例:教授、アカデミック・アドバイザー、留学生など) 2 者間だけでなく、3 者間のやりとりも含む
Part 2B (16 問)	長い英文の聞き取り	授業・講義などの聞き取り(図表も含む)

## Writing(100 点満点)

試験時間 70 分 問題数 2 問 解答方式は解答用紙への記入 評価方法は認定された採点者による採点

大問	問題形式	ねらいと特徴
Task A (1 問)	課題文の要約	説明文・評論文などの要約を書く。論説記事などを読み、70 語程度の要約を作成する。
Task B (1 問)	エッセイ	複数の情報(図表も含む)に基づいてエッセイを書く。複数の情報源(図表を含む)から論点を読み取り、それらを統合したうえで自身の考えを 200 語程度で展開することが求められる。

## Speaking(100 点満点)

試験時間約 10 分 問題数 4 問 解答方式は Examiner との 1 対 1 の面接方式 評価方法は認定された採点者による採点 なお、試験内容は録音され、採点に利用される

大問	問題形式	ねらいと特徴
Part 1 (1 問)	受験者の生活に関する質問(質問は複数)	受験者自身のことについて説明する。
Part 2 (1 問)	受験者が Examiner にインタビュー	ロールプレイ型、対話における効果的なやりとり、受験者が自ら対話をリードしていくことも求められる。
Part 3 (1 問)	1 つのテーマに沿ったスピーチ	与えられたテーマに関して、まとまりのあるスピーチをする。
Part 4 (1 問)	Q & A (質問は複数)	与えられた話題に関する質問に答える。

# グローバル時代に求められる英語教育

## ～ 実践女子のG S C 英語教育を例に～

実践女子学園中学校高等学校

グローバル教育部長 関 孝平

### はじめに

本校は1882年、校祖下田歌子が創設した桃天学校がその前身で、1899年には実践女学校・女子工芸学校を創設、1902年には当時の清国からの留学生の受け入れを開始するなど、国際性を踏まえた教育に1世紀以上前から取り組んできた。戦後は新制の実践女子学園中学校高等学校となり、1966年までに短大、大学、大学院を設置した総合学園となった。2003年度からは高校募集を停止して完全中高一貫校となり、2007年度には中学帰国生入試を開始、翌2008年度には本稿のテーマとなる国際学級・グローバルスタンダードクラス(以下G S C)を中1からの別募集で設置している。G S Cは帰国生が多く入学しているが、国内の一般の受験生も応募できるもので、帰国生が国内の教育に慣れるためのクラスではない。2014年3月、G S Cは最初の卒業生を送り出した。そこで、G S Cの構想から現在までを振り返り、今後求められる英語教育について考えてみたい。

### 〔G S Cの目指す女性像〕

1. 国内外問わず、友人の輪を作ることができる女性
2. グローバルな意識と教養を持ち、多様性を認めることができる女性
3. グローバルな社会問題に関心を持ち、自ら探究できる女性
4. クリエイティブに考え、主体的に活動できる女性
5. コミュニケーション能力に優れ、積極的に自己表現できる女性
6. 日本の文化を理解し、誇りを持って発信できる女性

### 1. 実践女子G S Cと私の歩みを振り返って

振り返れば、その始まりは2006年度、在職2年目、若干27歳のときであった。その年、私は初担任として高2を受け持っており、まだ若さが前面に出て、生徒とぶつかることもしょっちゅうであったが、英語教育と担任という2つの使命のもとにエネルギーに教育に向き合っていた。当然、翌年はそのまま高3の担任となって当時受け持っていた生徒たちを送り出すことを頭に描いていた。しかしその年の冬、本校の新たな教育の魅力としてG S Cが始まることになり、その立ち上げおよび英語教育の責任者として私が任命されたのである。校務分掌には「校長付き」というそれまで見たことのない名称が付き、座席は副校長の隣、そして担任も外れることになった。まさにこの年、学校の将来をかけたG S Cのプロジェクトの開始とともに、私の教員人生も予想もしていなかった方向に一気に舵が切られたのである。

このようにして始まったG S Cであるが、これまで、そして今でも試行錯誤の連続である。準備期の2007年からG S Cの3年目にあたる2010年までは、「いかに新しい英語教育を創り上げるのか」ということが一番の課題として私の頭を占めていた。また、帰国生が多く入学してくるクラスにおいて、「帰国生に対する英語教育とはどうあるべきか」という、これまでに経験したことのない課題に向き合っていなくてはならなかった。当然、一般クラスと同じ英語教育をしていたら、G S Cの生徒、保護者のニーズには応えられない。いかに「これまで」「今まで」にとらわれずに新しい英語教育を創り上げていくのか、それが私にとって一番の命題であった。

実は、G S C英語教育の構想を組み立てること自

体は時間を要さずにできた。「どういう英語力を育成したいのか」「そのためには英語教育はどうあるべきなのか」ということは英語教員として常日頃から考えており、自分の授業でも絵を用い英語でリーディングを教えたり、ペアワークで生徒の発話を促したりと、既に実践していたことが多くあった。要は、自分がもともと思い描いていた「こういう英語教育をしたい」という理想と信念をベースにし、「Academic English(大学でも通用する英語力)」を目標として、ストレートに英語教育に取り組んだだけである。

もちろん、頭で描くのと実際に形にするのでは全く異なり、多大な労力と時間を要した。特に、日本人が担当する文法授業では、独自の教材を開発することにしたため、最初の数年間については授業準備とプログラムの運営に追われていた記憶しか残っていないと言っても過言ではない。目覚まし時計はほぼ毎日午前3時台に設定され、徹夜に近い形で仕事に向かうことも少なくなかった。まさに自転車操業の日々であった。

そして、2011年に1つの転機が訪れた。その年は、1期生が3か月のオーストラリア留学プログラムに初めて臨む年であり、通常勤務に加えてその準備に追われ、ピークの6月には2度もじんましんに襲われながらも眠れず仕事に追われる日々が続いた。そんな中、2期生の中3の保護者から臨時保護者会を開きたいという申し入れがあった。GSCのプログラムについて、保護者と学校で意見交換をしたい、という趣旨であった。その会では、学校に対する質問やリクエストが相次いで出され、中にはとても手厳しい声もあった。多忙なスケジュールを縫った中で、大きなストレスも感じたが、そこで1つのことに気付かされた。いかに自分が英語の授業創りに没頭してしまっていたか、ということである。このクラスは英語特進クラスではない、グローバルスタディーズクラスなのだ。そして、その中の英語教育なのだ。「グローバル」という名にふさわしい教育を創るという、より大きな命題に改めて気付かされたのである。この保護者会は、間違いなくGSCにとってターニングポイントであり、このことがなかったら今のGSCは存在していないと断言できる。

その後、中学でのネイティブ副担任の配置、高校での英語セミナー、放課後講座、模擬国連活動、海外進学など、様々な取り組みを増やし、2014年春、1期生の卒業を経て今日に至る。今年度からは、グローバル教育の強化ということで、総合的な学習の時間を用い、早稲田大学、明海大学と連携してグローバルキャリアというプログラムを展開している。他にも取り組みたいことは山ほどある。一方で、意外なことに、現在の課題は「英語教育の充実」である。グローバル教育を推し進めていった結果、原点に戻ってきたのである。しかし、原点だからこそ、これからも突き詰めていかななくてはならず、改めて英語教育の奥深さに感心するとともに、ワクワクする思いである。

## 2. GSC英語教育のグランドデザイン： 3つの要素

### グランドデザイン：

#### アカデミックイングリッシュ

GSC英語教育の目標は「国内外の大学で通用する英語力」、いわゆる「アカデミックイングリッシュ」である。「中高生として身に付けるべき英語力とは何か」という問いにストレートに向き合った際、やはり「大学の授業で通用する英語力を身に付けさせたい」という答えに至った。そしてその力をもって大学で学問に向き合い、グローバル人材としての教養を深めてほしい、と願っている。そう考えると「英語の4技能」についても、講義を聞いてノートを取る、ディスカッションをする、エッセイやリサーチペーパーを書くといったスキルの育成が目標になってくる。本校では、それを念頭に中1から段階的なプログラム創りを行っている。

次のページで本プログラムを立ち上げる際に掲げた「GSC英語教育10のゴール」を紹介する。(『GSC Teacher's Handbook』より)。作成した当時からすでに7年が経過しており、修正を加えている部分もあれば、依然達成できていない部分もあるが、それでも、この「10のゴール」は創設以来揺らぐことがない。

## 〔G S C 英語教育 10 のゴール〕

## 【スキル/ストラテジー】

1. 海外の大学の授業を受講できる英語力(Academic English)を4技能バランスよく身に付け、専門的なコミュニケーションが取れる力を身に付ける。
2. ノンネイティブスピーカーとして、カベや不足を乗り越えるためのストラテジーを身に付ける。

## 【自主・自律学習】

3. 自らの学習に責任を持ち、授業に積極的に参加することができる。
4. 自らの学習を促進する力がある。(学習運営ストラテジー)

## 【国際人としての教養と資質】

5. 様々な分野に知的好奇心を持ち、学習人としての教養を身に付ける。
6. 自分のことや日本のことに関心を持ち、日本人としての教養を身に付ける。
7. 異文化や国際社会に関心を持ち、国際的な教養を身に付ける。
8. 国際人として理想とすべき像を持ち、国際社会に貢献できる考え方と資質を養う。

## 【コミュニケーション】

9. 積極的にコミュニケーションを行う姿勢を培う。
10. 相手に合わせて柔軟なコミュニケーションを行うことができる。

もちろん大学受験を無視することはできない。しっかりとそのニーズに応えることも等しく重要である。しかし、それだけで英語教育が終わってしまうのはやはり寂しい。「このような人材を育成したい」「このような英語教育をしたい」というしっかりとしたグランドデザインを大切にし、これからの人材を育成するための英語教育でありたい、と切に感じている。

## 3つの合言葉

私は毎年、中学入学式の際にG S Cの教室を訪れ、新入生とその保護者の前でこのような話をしている。

6年間大切にしてほしい3つの合言葉があります。「夢」、「自信」、「地道な努力」です。まず、「こういう自分になりたい」「このように将来活躍したい」「このように英語ができるようになりたい」、そのような大きな夢を持ってください。夢があったらくじけそうな時でも頑張れるし、何でもできます。次に、「自分ができる

んだ」という自信を持ってください。「できない」と思ったら何もできない。自分はできるんだ、という強い自信をもって、積極的に取り組んでください。最後に、地道な努力を大切にしましょう。努力しなくては夢はかないません。努力しなくては自信も失ってしまいます。しっかりと自分の夢と自信を支える努力をこつこつと積み重ねていきましょう。

中学、高校になると、英語も1つの教科となり、テストなども行われ、最終的には受験科目として大きな位置付けがなされる。しかし、理想論かもしれないが、やはり最終的には自分の夢のための英語学習であってほしいと願っている。またG S Cを選んで入学してきた以上、英語にプライドを持ち、「英語だけは誰にも負けたくない」という思いを持って臨んでほしいと思っている。英語教育と言うと、英語の授業のやり方やプログラムの内容が目立つことが多いが、一番大切なのはモチベーションを作り出す夢とビジョンである。

また、以前、「英語教育で大切にしてきた力は何か」と尋ねられた際、あえて私は「態度」と答えた。もちろん、座り方や話の聞き方という「態度」ではない。英語やコミュニケーション、グローバルに対するポジティブな態度という意味である。「ノンネイティブであっても、物おじせずにコミュニケーションが取れる」「英語やコミュニケーションが好きである」「様々な価値観に触れる中で、自分の価値観が揺らぐことを恐れない、むしろワクワクする」という気持ちや前向きな思考を育むことが、グローバル教育、英語教育の最大の基礎であると感じている。

#### 多様なバックグラウンドに合わせた教育

「多様性と個性を大切にする」ということは、当たり前のことのように聞こえるが、日本の英語教育ではそれが意外と難しい。しかし、このG S Cには国内生、帰国生の両方が在籍しており、帰国生のバックグラウンドも様々である。そして、このようなクラスにおいて「多様性」「個性」は重要なキーワードである。

例えば、英語の授業は、A、B、Cクラスの3つのレベルに分けて行っているが、その目標は全員がAクラスに追いついて卒業することではない。上は10年以上海外生活にいたセミネイティブの生徒もいれば、下は英検4級にやっと届くぐらいの生徒である。それぞれのバックグラウンドに合わせた教育を行うのがG S C教育の本筋であり、そうである以上、目標レベルも各自異なってしかるべきであろう。重要なのは「それぞれが自分に合ったチャレンジをする」というコンセプトである。当然、Aクラスでは高度な課題が課され、また入試対策でも超ハイレベルな問題に取り組んでいる。もちろんCクラスでも、基本的な内容からであるとはいえ、沢山の課題が与えられ、日々英語学習に取り組んでいる生徒の姿が見られる。このように、内容や目標を平均化するのではなく、レベルに応じた授業を展開し、生徒一人ひとりにチャレンジを等しく与えることを大切にしている。

以下の、ベネッセのG T E Cの結果を見ていただきたい。左側が本校G S C中学3年間のスコア、右側が高校の全国平均である。中3時のスコアを見る

と、Aクラスは高3全国平均より約230点、Bクラスでも約120点高いスコアを出している(AクラスのレベルになるとG T E Cなどではその英語力は測りきれず、あくまでも参考スコアとして考えていただきたい)。しかし、ここで注目すべきはCクラスである。Cクラスでも着実に力を伸ばし、中3時には高2の全国平均とほぼ同じ点数に届いているのだ。これを見ても、各クラスがそれぞれ目標に向かって伸びていることが分かっていただけるだろう。

#### 〔ベネッセG T E C結果〕

本校G S C平均 中学生				全国平均 高校生	
クラス	A	B	C		
中1	639	505	304	高1	408
中2	677	540	361	高2	445
中3	697	581	444	高3	464

一方で、各レベルを完全に固定化するのではなく、頑張る生徒には上のクラスに上がるチャンスを与え、努力に応じて更なる挑戦ができるようにも工夫している。現高3の2期生では、入学当初よりCクラスで学んでいた生徒がこの度Aクラスに仲間入りを果たし、加えて、直後のクラス内テストでは、元々のAクラスの生徒を抑えトップの点数をたたき出した。このことは、自らチャレンジを求める姿勢を促したことで、本人のモチベーションに火が付いただけでなく、上位の生徒にこれ以上ないインパクトを与えてくれ、また、後輩たちにも大きな刺激と励みになったという点でも大きな意味を持っている。

### 3. 特徴的な英語教育活動の例

#### ～授業の様子から～

ここでは、生徒の様子に見受けられるG S C英語教育の特徴的な実践例を紹介したい。

#### プロジェクト

「学習の成果を形にし、英語をコミュニケーションの道具として使おう」というテーマのもと、随時プロジェクトを行っている。時には英語の授業だけでなく、朝学習の時間や総合的な学習の時間と連携



しながら、レポート、発表といった形で英語の作品を仕上げていく。ここでポイントなのが、「伝える相手」と「伝えたい内容」をしっかりと意識させることである。従来の英語教育では、「英語はコミュニケーションの道具」と言いつつも、コミュニケーションで本来必須であるはずの「伝えたい内容」「伝える相手」が不在で、ノートや黒板、教師と向き合っている時間が大半である。例えばスピーチの指導をしても、原稿を手にしてうつむきながら話すような光景が多く見受けられ、「わかりやすく伝えよう、面白く伝えよう」といった創意工夫も乏しく、その結果、達成感も糧になる失敗もない。このプロジェクトでは、「伝えたい内容と相手がいれば、自然とコミュニケーションが生まれ、発達する」という考えを大切に、生徒の内から出るコミュニケーション欲求を刺激している。

特にユニークな例として、中3の移動教室プロジェクトをぜひご紹介したい。「移動教室で訪問する奈良、京都の紹介ビデオを作る」というものだが、なんと移動教室中に現地でレポートをし、ビデオに撮ってくるのである。東大寺の紹介を実際に東大寺の前で、三年坂の紹介を三年坂の前で、といった具合である。移動教室の事前学習として、朝学習の時間や英語の授業の中で準備と練習を積み重ね、さらには宿泊先のホテルでも自発的にリハーサルをしたというのだから驚きである。もちろん言語は英語であり、身振り手振り、さらには演技も加えて、素晴らしい作品を仕上げてくれた。周りの観光客の目をもろともせず、いや、むしろ注目をパワーに変えて、GSC生の抜群の存在感を古都で発揮してくれてきた。私たちが少し仕掛けをし、その舞台が整うと、こんなにも生徒がイキイキとするのか、と改めて気付かされる。たとえ、ペーパーテストでは点数が取れなくても、このようなプロジェクトでは「本当にこれは同じ生徒か」、そう疑いたくなるくらい輝くのである。毎回ながら、プロジェクトを行うたびに、生徒のクリエイティビティに驚かされるとともに、「この生徒の素質を引き出さなかったらもったいない」と感じる。

中高の英語教育においてテストが重要な位置を占めることは間違いないが、一方で、「英語力」にはテ

ストで測れない要素が数えきれないほど含まれている。それらの要素をいかに活かし、多面的なアプローチができるかが生きた英語教育を行うカギであり、生徒の態度やモチベーションを育てるカギだと信じている。私たち教員は、生徒にそのような輝きが本来備わっているということに気付き、その芽を伸ばしていくような雰囲気づくりやアイデア作りを行っていかなくてはならない。

なお、移動教室から戻った後、そのビデオを編集して1枚のDVDにまとめたものが、生徒の中で評判となっている。実際に自分たちの学習が形に残るということも、モチベーションの向上という点で大きな意義がある。今では、10月の学園祭にむけて、GSCの紹介DVDを作りたいという企画が生徒から持ち上がっているほどであり、非常に嬉しいことだ。

#### イングリッシュセミナー

本校の英語教育で最も特色的なのが、高2で週に1回行われるイングリッシュセミナーであろう。1クラスを5展開させ、1人の教員に対して5~6人の生徒という、実に贅沢な少人数セミナーを実施している。まさに雰囲気は大学のゼミさながらである。1年間通して「異文化コミュニケーションとグローバル人材」というテーマのもと、リーディングを読み、ディスカッションをし、ミニプレゼンテーションをベースに授業を進め、さらに毎週2ページのライティング課題をこなす。「異文化理解とは何か」「文化にはどのような要素があるのか」という理論的なものから、自分たちのオーストラリア留学やケーススタディーの議論など、各授業で扱うテーマは多岐に渡り、自分で考え、積極的に発言することが求められる。リーディング課題は、単に文章の内容を理解させるものではなく、読解はあくまでも予備知識であり、その上で何を考え、何を議論するのか、ということの主眼に置いている。そのため、キーコンセプトを確認する以外は、どれだけ文章の内容を理解しているのかは一切問わず、どれだけ自分の意見を持っているか、どのように課題解決に取り組んでいるかが最重要項目になる。そして評価はプレゼン、ライティングといった課題と、授業の参加度、積極

性のみで付けられる。

加えて、高2後期から高3にかけて、それぞれの生徒がグローバルな社会課題を取り上げ、卒業プロジェクトとして8ページのリサーチペーパーを仕上げる。しかも6つ以上の参考文献の引用が必須であり、加えてそのフォーマットはAPAという世界的な論文フォーマットに従っており、生徒は引用の仕方や参考文献の書き方をも学習する。高校生にとっては非常にハイレベルな課題であるが、GSCというクラスで学んできた以上、グローバル市民としての問題意識と多角的な視野を持って卒業してほしいという強い思いのもとこのプロジェクトを設定している。

#### [イングリッシュセミナー授業風景]



さらに今年度からは、高1の総合的な学習の時間で、早稲田大学、明海大学と連携して、「グローバルビジネスとリーダーシップ」というテーマを中心に、グローバルキャリアプログラムを展開している。この高1のプログラムと高2のセミナーを軸として、「これからのグローバル時代でどのようなキャリアを設計し、どのように社会貢献するのか」ということを考えさせていきたい。

正直、このセミナーは私たち教員にとっても、とても大変なものである。まず、英語という科目に加えて、「異文化コミュニケーション」という科目を教えているようなもので、いくら入門レベルといえども、その分野に不慣れな教員にとっては勉強や準備に時間がかかる。そして、何よりも毎週生徒のレベルに合ったリーディングを探し出し、授業を組み立てていかななくてはならない。また授業は、生徒のデ

ィスカッションやプレゼンテーションが中心なので、決まりきったレッシンプランがあるわけではなく、発言をうまく拾い、それに合わせながら、その場で柔軟に対応しながら授業を進めていかななくてはならない。セミナーにはネイティブ教員のセッションと日本人教員のセッションがあるが、私たち日本人教員にとっては、これらを英語で行っていくため、相当な力量が必要となる。

それでも、私にとってはこのセミナーが一番楽しい授業であり、英語教育の最大の醍醐味だと感じている。それは、私たちの目指すアカデミックイングリッシュを具現化しているという点だけでなく、生徒の参加によってレッスンが組み立てられるため、彼女たちとともに授業を作っている感覚を強く持てるからである。先日、1期生の生徒が卒業後にこのような報告をくれた。「大学の授業がとても簡単を感じる。エッセイ課題なども出て、周りの生徒は苦しんでいるが、私はセミナーを受けていたので、何も苦労していない。大学に入って、GSCで身に付けたことが役に立つということを改めて実感した。」本当に嬉しい報告だった。苦労を重ねながら創ってきたプログラムであるが、少しは私たちの理想が実現でき、生徒に還元できたのであれば、これほど教員冥利に尽きるものはない。

#### 実践する場の意義

英語教育というと「いかに英語の授業を組み立てるか」ということに終始しがちだが、ここ数年「いかに活躍の場を見つけさせるか」ということが大きな命題になりつつある。最初のきっかけは2011年の模擬国連だった。1期生が応募し、いきなり全国大会に出場したかと思えば、優秀賞を受賞し、そのままニューヨークの国際大会に出場したのである。その後、本校は3年連続で国際大会の切符を勝ち取り、今や模擬国連の強豪校となっているわけだが、ある意味「実践女子で代表になれば、ニューヨークに行ける」という分かりやすい公式が提示されているのである。それだけで生徒は自然にスイッチが入り、走り出してしまふ。大学生でも難しいような課題に自ら取り組み、互いが競い合い、切磋琢磨しながら課題解決をしていく。実際に、学内予選や大会が迫

るにつれ、放課後もコンピューター室にこもって作業やミーティングをしている生徒を見ると、高校生がいかにもすごいバイタリティーを秘めているかを感じてくる。

外部のスピーチコンテストでも同様である。IPC・IPU杯というスピーチコンテストへの応募を奨励したところ、高校GSCで、実に15名もの生徒が手を挙げた。短期間で1人5分のスピーチを仕上げ、そのDVD録画を用意しなくてはならず、我々教員も付きっきりの指導に大変苦労したのだが、生徒のやる気と頑張りにも私たちがいつの間にか引き込まれてしまった。実際に全国大会に出場したのはその中の1名だったが、応募した生徒全員が素晴らしい努力と成長を見せてくれた。他にも、2013年度には、中国語の関東地区発表大会で最優秀賞と優秀賞のダブル受賞、韓国語スピーチコンテストでは優秀賞を受賞する生徒が出た(しかも韓国語の生徒は全て独学である)。このように、自分が輝く場所と実践的な目標を見つけた生徒は、自らモチベーションに点火をし、成長していくのだということを実感するばかりである。

#### 4. 進路実績とグローバル効果

このような英語教育を行う中で、大学受験とのバランスについて問われることもあるが、「大学受験で必要な英語力」と「アカデミックイングリッシュ」は果たして別物であろうか。私は英語力が木の幹であり、受験対策が枝だと考えている。木の幹が成長

しなくては、どんなに枝を伸ばそうとしても意味がない。「問題を解くトレーニング」という意味では多少異なる部分があるとしても、しっかりとした実践的な英語力を身に付けることが受験においても一番の近道であり王道であると言える。特に最近の受験では読解問題も長文化しており、ますます速く読み大意を取る力が必要となってきている。さらに、TOEFLやTEAP利用入試など多様化する受験において、実践的な英語教育の幅を広げ、多面的に対応できる英語力を受験指導の中でも養成していく必要が出てくる。GSCでは、片方だけに寄った英語教育は行わず、目標であるアカデミックイングリッシュの育成を行うと共に、幅広い進路選択が実現可能となるようにカリキュラムを組んでいる。

進路の手当も重要な責務であり、高2から選択授業や放課後講座を用意し、国内、海外の進路希望に合わせて進学指導を行っている。現在高3の授業では、TOEFL対策を2展開、国内一般受験対策を3展開と、1クラスを合計5展開させ、それぞれのニーズに合わせて授業展開することで、充実した手当を行っている。

そして、2014年春、注目されていたGSCの1期生の大学合格実績が出た。以下の通り、在籍25名の中で、堂々たる実績と言える。特にAO入試では、帰国生や模擬国連での活躍など、彼女たちの特性や実績が高く評価され、素晴らしい結果を残してくれた。また海外進学も実人数は1人であるが、初年度にして進学者を出すことができた。

#### 〔GSC 1期生の大学合格実績〕

東京農工	1	法政	5	大東文化	1	神奈川歯科	1
横浜国立	1	津田塾	1	東京女子	2	実践女子	4
早稲田	4	北里	1	日本女子	1	Cornell College	1
慶應義塾	1	明治学院	4	跡見女子	1	Ithaca College	1
上智	3	成蹊	1	学習院女子	2	Wartburg College	1
東京理科	1	駒澤	1	共立女子	1	Washington & Jefferson College	1
国際基督教	1	専修	1	清泉女子	2		
明治	1	日本	3	昭和	1	進学準備	2
青山学院	1	東洋	1	日本歯科	1	卒業生が少なく、個人の特定につながるため学部は非公表	
立教	1	大正	1	鶴見	1		

2014年度の大学受験は、GSCだけでなく学校全体の進路実績が飛躍した年だと言える。下の表は本校のこの4年間の大学合格実績で、この4年間右肩上がりに推移している。特に2014年は、GSCの創設に伴い、在来コースのSJCの募集定員を320名から240名に削減した学年であり、高3生の学年全体の在籍数は、その前の年と比べると65名も少ない数であった。しかし、その人数の差をもとせず、さらに実績を躍進させたのである。これには3つの要因があると私は考えている。まずは地道な学力改革の成果、キャリア教育による進路指導の充実、そして最後にグローバル効果である。グローバル効果とは、つまりGSCや帰国生、そして模擬国連で活躍した生徒の存在が、他の生徒の刺激となって相乗効果を生み出した、ということに他ならない。実際に私は昨年、今年と、在来のSJCの高3発展クラスとGSCの高3の両方の英語を担当したが、いい意味でのライバル心が各自に芽生え、切磋琢磨している様子を伺い知ることができた。そのような、目に見えない化学反応が間違いなく存在し、学校のマインドを変えている。それは海外進学の数に顕著に表れており、学校全体で2014年は13名(実人数4名)もの合格実績を打ち出した。その点からも、GSCやグローバル教育の効果は大きく、着実に成果を出していると言える。

#### 〔学校全体の合格実績の推移〕

年度	2011	2012	2013	2014
国公立	11	13	13	8
早慶上理ICU	12	30	60	76
GMARCH	74	146	165	196
海外進学	0	0	3	13

#### 5. グローバル時代の英語教育：課題と提言

今後、グローバル化と少子高齢化が進む中で、グローバル人材育成と女性の社会参画が重要なカギになってくることは間違いない。特に2013年は、政府の「日本再興戦略～Japan is Back」に端を発して、財政会、教育界の両方においてもグローバル化の波が加速した1年であった。今年1年の変化はこれま

でなく大きなものであり、後になって振り返れば2013年は「グローバル教育維新0年度」になるのではないかと、個人的に感じているほどである。スーパーグローバルハイスクール、IB日本語プログラムなどはあくまでもその氷山の一角であり、これから否応なしにグローバル教育が中高で問われる時代になる。グローバル教育が全てだとは言わないが、今後の学校教育を左右する要素となることは明白であろう。そのような時代の流れや社会からの要請に沿って、グローバル教育および英語教育改革を推進していくことが今後学校教育に求められることであり、特に私学はその要請に積極的に応えていく義務があるだろう。

その中で、一番のカギとなるのはやはり教員の変容である。私自身これまでに様々なセミナーに参加する中で、企業をはじめ、外部の方とも話す機会が多くあったが、「学校の先生が時代の波についていけない」ということを耳が痛いほど聞いてきた。変化を強いられることは確かに嫌なことで、面倒くさいかもしれないが、時代が変化していく以上、抵抗しようが何しようが、遅かれ早かれ必要なことである。

私は、グローバル教育は最も難しい教育の1つだと考えている。それは「40年のギャップを埋める教育」だからである。私たちが受けてきた教育は(年齢によって異なるだろうが)20～30年前のものであり、その価値観では今の時代には通用しない。それどころか、これからの生徒は20年後の世界で活躍をしなければならず、その時代に必要な人材像を意識して教育に取り組みなくてはならない。これからの生徒が向き合う時代はどのようなものか、そしてその時代で活躍するにはどのようなスキルが必要なのか、私たち教員が自らの価値観を変えて、臨まなくてはならない。

特に英語科の教員の変容は必須である。私は、今後の英語教員に求められる資質として以下の5つを挙げている。

TOEFLで自ら100点が取れる  
TOEFLを教えることができる  
当たり前前に英語で授業ができる

ネイティブ教員と交渉、コミュニケーションができる  
グローバル教育をリードすることができる

当然、英語科の教員の負担は相当なものである。また、そのような教員になるのは簡単なことではない。しかし、この時代に英語科教員としての道を選んだからには、「英語」と名のつくプロフェッショナルとしてその責務を果たしていかななくてはいけない。今後のグローバル教育に英語科のリーダーシップは不可欠である。一方で、学校は英語科依存を脱するために、学校全体の課題としてグローバル教育に取り組み、それと相互作用する形で英語教育改革を進めていくことが必須だろう。

確かに、「グローバル教育 = 英語、国際交流」という図式はもう古い。しかし、「英語ができて当たり前、英語ができるだけではダメ」「今は英語以外の必要性が高まっている」と言われれば言われるほど、英語の重要性が高まっているのではないだろうか。特に「中高ですべきグローバル教育」という観点に立てば、英語教育の担う役割はより一層大きいものになっている。そのような社会状況の中で、私たちが育てるべき人材像を明確にし、新たな教育のグランドデザインを構築し、それに向けて教育改革をして

いくことが重要な課題となってくるのだろう。

## 7. 最後に

2014年3月3日、G S Cの1期生が卒業を迎えた。私にとっては、6年間持ちあがった生徒たちの卒業式である。式の後、ホームルームに移動して、担任とともに一人ひとりに卒業証書を渡し、はなむけの言葉を述べた。直前まで卒業の実感もなく、「泣かない」と思っていたが、話し始めた瞬間、思わず涙で言葉が詰まってしまった。色々な思いがあった。言葉では言い尽くせないほど大変な6年間であった。しかし、私自身、生徒とともに成長でき、教員生活で絶対忘れることができない6年間でもあった。やっと6年が終わっただけ、なのかもしれない。何かを成し遂げたという感覚はまだない。それこそ、まだまだ課題は山積である。やりたいこと、やらなくてはならないこともたくさんある。私は、この6年間、数えきれないほどの失敗をし、試行錯誤を続けてきた。それが今の私のプライドである。だからこそ、誰よりもグローバル教育について考え、一生懸命取り組んできたという自負がある。これからも「日本に誇れるグローバル教育を作る」という目標のもとに、地道に試行錯誤を続けていきたい。

### 編集後記

「E-REPORT」の第4号は「英語教育の新しい流れ」と題して、各校の最近の取り組みや、新しい英語のテスト「TEAP」について取り上げました。英語教育については、以前から「受験英語と使える英語」など、様々な課題から議論が続いていますが、グローバル化への要請から、教育現場では「英語を使って『何か』ができる力の育成」にもっと力を入れなければならないでしょう。今回は編集部のお願いに快諾いただいた5校・1団体に原稿をお願いしましたが、英語教育は実にいろいろな取り組みがあり、成果をあげている学校・団体はこの号でご紹介した事例だけではありません。改めて別の機会も考えていきたいと思えます。次号ではICT教育についての特集を予定しています。

< T生 >

・記事内容・配信・転載等についてのお問い合わせは

(株)エデュケーションネットワーク データ課 担当 池田 までお願いいたします。

なお、6月に移転しました。電話・ファクスも新番号です。よろしくお願いたします。

〒336-0018 さいたま市南区南本町2-14-15 南浦和EGビル3F

048-711-7261 Fax 048-711-7262 Eメール: ikeda@e-network.jp